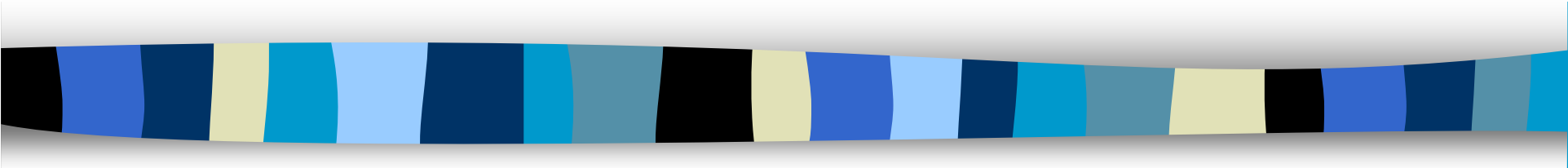


0912220 研究会「ユーラシア地域大国の神秘主義をめぐって」

# 「神秘の東洋」という言説



## インドからの見取り図



# はじめに

- 別添 資料1 参照



# 遠藤周作の《神秘のインド》

- ニューエイジ経由
  - ニューエイジ ⇒ 新靈性運動／文化
- Spiritual; Meditational; Esoteric
  - 《神秘のインド》観の最強の供給源
- 《東洋の神秘》



# 《神秘》概念の系譜

- 現代世界で通用している《神秘》概念はどこから？
- 西欧の神秘主義（mysticism）の系譜
  - 《東洋の神秘》表象はその力場のなかで構成されたようだ
  - そして《神秘のインド》表象も



# 西欧の神秘主義の系譜（1）

- グノーシス ⇒ エソテリズム
  - 錬金術
  - 新プラトン主義
    - ヒルデガルト(1098-1179)
    - エックハルト(1260頃-1328頃) など



## 西欧の神秘主義の系譜（2）

- オカルティズム
- ミスティシズム
  - 多くの場合、キリスト教の枠内
  - おそらくは、20世紀前半に 脱キリスト教化



# 東欧、とくにロシアの場合

- 東方正教会におけるエソテリズムの重要性
  - 土着の靈的世界 + 静寂主義
- 19世紀後半、ロシアの神秘主義
  - ブラヴァツキー夫人(1831-1891)
  - 神智学協会(1875-)



# 《神秘のインド》表象へのアプローチ

- 以上のような理解を前提に・・・
- 現在も流通する《神秘のインド》表象に  
どうアプローチするか



# 研究対象の仕分け

1. 欧州エリート（＋大衆）
  2. インド・エリート（＋大衆）  
＋
  3. その他の地域（日本など）のエリート（＋大衆）
- まずは「欧州エリート」をターゲットに



# 欧州エリートの世界

- 欧州エリートの世界のなかで  
《神秘のインド》表象を系譜づける
  - とくに 英＋独＋仏（＋蘭）



## 18c前半 東洋学の誕生

- カトリック宣教師
  - イエズス会、パリ外国宣教会など ⇒ 東洋学
- ここで東洋とは・・・  
エジプト、小アジア、中東、イラン、中国、  
東南アジア、日本  
そして インド



# 東洋学の中のインド

- Robert de Nobili (1577-1605)
- Abbé Dubois (1765-1848)
  - *Mœurs, institutions, et cérémonies des peuples de l'Inde* (1806)
  - 英訳 *Hindu Manners, Customs and Ceremonies* (1816)



## 18c後半～ イギリス

- イギリス植民地支配の確立 拡大 深化  
⇒ 東洋学の確立 拡大 深化
- 「東洋」から「インド」が析出
- ウィリアム・ジョーンズ(1746-1794)



# ウィリアム・ジョーンズ

- 1784 ベンガル・アジア協会 設立
- 1785 印欧語族の「発見」
  - ※ 同年 Charles Wilkins、『バガヴァッド・ギーター』翻訳
- 1789 『シャクンタラー』翻訳
- 1794 『マヌ法典』翻訳
  - ※ 1837 Henry Thomas Colebrooke, *Essays on the Religion and Philosophy of the Hindus*



# ウパニシャッド

- 1801 ラテン語訳『ウプネカット』
  - ショーペンハウエルが絶賛
- 訳者：A. H. Anquetil-Duperron (1731-1805)
  - インド・イラン研究の先駆者
  - とくにゾロアスター教研究



## 18c末～19c初 前期ロマン主義

- シュレーゲル兄(1767-1845)
  - インド哲学への傾倒
- ショーペンハウエル(1788-1860)
  - 『意志と表象としての世界』(1819)
  - ウパニシャッド、仏教を高く評価



# 仏教

- 1820年代:  
Bouddismet (Buddhism) 概念の誕生
- 仏教礼賛  
(ex. ショーペンハウエル ⇒ ニーチェ)
- 仏教への怖れ  
(「無」の教説)



# 19c後半から20c初頭

- 《東洋》《インド》の《神秘》への関心
  - A) 近代人文学
    - ex. 言語学、宗教学、神話学、人類学
  - B) 文学、美術、音楽などの近代欧州芸術
    - ex. フランスの象徴派 マラルメ[1842-1898]
  - C) 社会＝文化＝政治運動
    - ex. 神智学、ナチズム



## 19c末から20c前半 ドイツ

- 西欧文明／西洋文明／キリスト教文明  
とくにその「再建」への大きな関心
- 《インド》ないしは《神秘のインド》への関心
  - ハイラー(1862-1967)
  - オットー(1869-1937)
  - ユング(1875-1961) など



# 神智学とスピリチュアリズム

- 近代スピリチュアリズム
    - 1848 フォックス姉妹のハイズヴィル事件
  - 神智学
    - ※ 神智学協会批判も
      - ex. ユング、エリアーデ(1907-1986)
- ↓
- 《神秘のインド》表象のグローバル化のインフラ？



# ヴィヴェーカーナンダ (1863-1902)

- 欧米で注目を集めたたくさんのグル／スワミー／サンニャーシー
  - 過去の人物
    - ex. ミラレパ(1040-1123 チベット仏教 密教)
  - 同時代の人物
- その上へヴィヴェーカーナンダ登場
  - 1893 第一回世界宗教会議 @シカゴ
    - ⇒ 欧米での積極的活動へ



# グローバル化の局面

- 《神秘のインド》表象のグローバル化  
アメリカが中心的舞台に
- D) カウンター・カルチャー、ニューエイジ
- E) 現代の「新霊性運動＝文化」
- F) 現代日本へ



# アメリカ

- 不明の点があまりに多い
- スピリチュアリズム（19世紀後半～）
- 産業化 功利主義 科学主義
- 二度の世界大戦
- カウンター・カルチャー（20世紀後半～）



# 今後の見通し

- 欧州における《神秘のインド》表象の成立展開過程
- アメリカとの通行
  - 19世紀半ばから20世紀前半を重点的に
  - ニューエイジの源泉（文学が突破口か？）
  - アメリカ文化のグローバル化の局面



## さらなる課題

- 同様の過程を 対象を変えてフォローする
  - 欧州の民衆 ⇒ インドのエリート／民衆
- 3年から5年はかかる研究



# 参考文献

- 別添 資料2 参照

## 「神秘の東洋」という言説

### インドからの見取り図

近藤光博 (fwih3395@mb.infoweb.ne.jp)

#### 1. はじめに

ある日、「遠藤周作とインド」というテーマでの原稿執筆依頼が私のところに舞いこんだ。今もって、どうしてそういうことになったのかは不明だが（接点皆無の日本文学研究筋からの依頼だった）、『深い河』を何度か読んでいた私は、書くべきことがあると直観して依頼を引き受けた。四苦八苦して書きあげた原稿は、論文集として無事公刊された（近藤 2008）。



このエッセイを書いていて痛感させられたことがある。それは、『深い河』論は、単に、インドに対する現代日本人の向き合い方を問うということだけではなく、宗教論の本質的な問題設定に直結している、ということだ。そして、宗教学者を名乗っている私は、それに応答する十分な構えをもっていない、と。

宗教論／宗教学／宗教研究の根本概念は「宗教」である。そして、そのようなものとしての「宗教」概念は、まったく近代的である。

どのような意味においてか。第一に、それが西洋出自の概念である、すなわち、キリスト教をベースとした概念であるという点で。第二に、宗教とはいまや宇宙と存在のサブシステムであるという点で。そして第三に、宗教とはいまや人間存在に普遍的である、言い換えれば、あらゆる諸宗教は根源的に同質であるという点で。<sup>1</sup>

第二の点を原理化してきたのが理神論の系譜である一方、第三の点の原理化は、広い意味でのロマン主義により主導されてきた。近代の宗教概念とその論／学／研究という営みは、西洋キリスト教という背景のもとでの、この二つの系譜の（決して整合的とはいえないままの）統合である。



《インド》を紛れもない《神秘》と直観するにあたり、遠藤周作はむしろ、宗教論／学／研究の原理的な構造自体に切り込んでいる。なぜなら、遠藤の《神秘のインド》観念は、直接的には 20 世紀後半のアメリカのニューエイジの採用であるのは明らかであり、さらにその淵源として、「生」「力」そして「神秘」を基本概念とした欧州のロマン主義に棹差す

---

<sup>1</sup> ただし、宗教概念の近代性をめぐる非西洋地域の歴史的事情の記述は、別の項目と筋道を要するだろう。ここでは、とりあえず西洋地域に即して記述をすすめる。

ことも明らかであるからだ。

このことを確認した私は、勉強をしなおすことにした。掲げた問いは単純なものだった。

——《インド》はいつから《神秘》ということになったのか

——誰がそのように観念したのか

——その観念は、いつどのような経路をたどって遠藤にまで至ったのか

まずは、大まかな見取り図が私の脳裏に浮かんだ。これはロマン主義研究、神秘主義研究を介しての宗教学基礎論のようなものになるだろう。

さらに、南アジア地域研究にとっては、少なくとも三つの課題への貢献となるだろう。

① 文化の政治学、「表象の政治学」(スレーリ)の問題として、ナショナリズムとポストコロニアリズム理解の中心への切り込み

② 上のことと関連して、南アジアと西洋地域とのグローバルな交渉史記述の具体的な実践(キーワードとしては、帝国、資本主義、オリエンタリズム、オクシデンタリズムなど)

③ 変貌著しい《現代インド》(国民国家インドの現在)へのアプローチの再検討

こうした見通しだけは得られるものの、その細部がとにかく分からない。このテーマは、個人研究としては到底完遂できず、共同研究という形をとらざるをえない、このことは最初から明らかだった。



ということで、このたび、多くの方がたのご協力を得て「《神秘のインド》研究会」を立ち上げることができた。<sup>2</sup>

まだ始まったばかりの研究会なので、結論めいたことは言えない。本発表では、量的にはわずかでも、質的に大変充実した議論の成果を組みこんだうえで、私がつけている見取り図を紹介させていただきたい。

---

<sup>2</sup> とくに井上貴子さんという力強いパートナーを得たことが最初の一步として決定的だった。その後、共同研究者の先生方はもちろん、話題を投げかけた先生方からも激励をいただくことで、本共同研究は順調なスタートを切っている。この場を借りて、皆さんに御礼申し上げます。

## 2. 参考文献

### <雑誌>

- 『スターピープル』2009 Summer, vol. 29 (特集: ニューエイジ vs. スピリチュアル—統合を目指して—) ナチュラルスピリット89

### <単行書, 論文等>

- Breckenridge, Carol A. & Peter van der Veer eds. 1992, *Orientalism and the Postcolonial Predicament: Perspectives on South Asia*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Clayton, Martin, & Bennett Zon eds. 2007, *Music and Orientalism in the British Empire, 1780s-1940: Portrayal of the East*. Burlington: Ashgate Publishing Company.
- Cohn, Barnard S. 1997, *Colonialism and Its Forms of Knowledge: The British India*. New Delhi: Oxford University Press. (1980年代の主要論考を収録)
- Guha, Ranajit, et al. eds. 1982-2000, *Subaltern Studies: Writing on South Asian History and Society*. Vol.1-11, New Delhi: Oxford University Press.
- Halbfass, Wilhelm, 1988, *India and Europe: An Essay in Understanding*. Albany: State University of New York Press.
- Inden, Ronald B. 1990, *Imagining India*. Oxford and Cambridge, MA: Basil Blackwell.
- King, Richard, 1999, *Orientalism and Religion: Postcolonial Theory, India and "The Mystic East"*. London and New York: Routledge.
- Mabilat, Claire, 2008, *Orientalism and Representations of Music in the Nineteenth-Century British Popular Arts*. Burlington: Ashgate Publishing Company.
- van der Veer, Peter, *Imperial Encounter*, 2001.
  
- 井上貴子 2006 『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』青弓社.
- ——— 2007 『ビートルズと旅するインド、芸能と神秘の世界』柘植書房新社, 2007年8月.
- ——— 2009 「東洋学からオリエンタリズムへの射程—インドの音楽芸能研究を事例として—」新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」(研究代表者: 望月哲男) 合同研究会 (2009年3月3-4日) 報告要旨 [http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group\\_06/achievements/files/20090303\\_04\\_inoue.pdf](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_06/achievements/files/20090303_04_inoue.pdf)
- 近藤光博 2008 「インドとの共生:《インド》なる表象の刷新のために『深い河』を再読する」柘植光彦編『遠藤周作: 挑発する作家』至文堂, 2008年10月, 179-88頁.
- サイド、エドワード・W 1993 『オリエンタリズム』上下、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー(1986、平凡社). (Edward W. Said, 1978, *Orientalism*.)

- ——— 1995 『音楽のエラボレーション』大橋洋一訳、みすず書房。(Edward W. Said, *Musical Elaborations*, 1991)
- ——— 1998、2001 『文化と帝国主義』第1巻(1998)、第2巻(2001)、大橋洋一訳、みすず書房。(Edward W. Said, 1993, *Culture and Imperialism*.)
- スピヴァック、G. C. 2003 『ポストコロニアル理性批判：消え去りゆく現在の歴史のために』上村忠男・本橋哲也訳、月曜社。(Spivak, Gayatri Chakravorty, 1999, *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*.)
- スレーリ、サーラ 2000 『修辞の政治学：植民地インドの表象をめぐって』川端康雄、吉村玲子訳、平凡社。(Suleri, Sara, 1992, *The Rhetoric of English India*.)
- 富澤かな 2000 「書評 Richard King, *Orientalism and Religion: Postcolonial theory, India and the 'Mystic East'*」『東京大学宗教学年報』第17号，2000年，197～201頁。
- ドロワ，ロジェ=ポル 2002 『虚無の信仰：西欧はなぜ仏教を怖れたか』島田裕巳・田桐正彦訳，トランスビュー。
- バーバ、K. ホミ 2005 『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相—』本橋哲也他訳、法政大学出版局。(Homi K. Bhabha, 1994, *The Location of Culture*.)
- マッケンジー、ジョン・M 2001 『大英帝国のオリエンタリズム：歴史・理論・諸芸術—』平田雅博訳、ミネルヴァ書房。(John M. Mackenzie, 1995, *Orientalism: History, Theory and the Arts*.)
- 三浦清宏 2008 『近代スピリチュアリズムの歴史：心霊研究から超心理学へ』講談社